

坂 仙 気

日曜日だし天気はいいし、家にいるのもなんだし、んであ「山さでも登ってみっか」というわけで、息子と二人で五葉登山となったという。以下は同僚の話だが、登っただけの収穫があったという。

一つは頂上付近でサル二頭に遭遇したこと。これは滅多にないチャンスで、「写真撮ったが?」と聞くとデジタルカメラの撮影倍率が低いため断念したという。もう一つは鹿の群を自撃できたこと。こちらはいつでも見られるからその感興もわくまいと思うのだが、それも状況による。中腹の草原で群れが移動する様子は動物番組の一シーンを思いで、これまた感動したという。

小紙に連載中の「五葉山の魅力」は、すでに五十四回を数えているがこんなにも寄稿者が多いというのは、この山が文字通りそれだけの魅力を備えているからに他なるまい。

恥ずかしながら五葉登山をしたのはわずか四、五回ほどしかない。

い。しかも最後は十数年前。以後は登る自信がないからそのままになっている。なにせ普段はウォーキングもせず、万歩計のお世話にもなっていないので標高三五一メートルを往復する脚力などとても保証できないのである。「トレッキング」を辞書で引くと「多少難儀しながらする小旅行、登山」などがあるが、そもそもその難儀が苦手なのかもしれない。いや苦手だ。

五葉山の思い出断片

しかし五葉山の魅力については

双手をあげて賛成できる。中でも思い出深いのは、しゃくなげ観賞会に登って山小屋の下にある湧き水に缶ビールを冷やしておき、頂上から戻って飲んだときのそのうまさはこの世のものとは思われなかった。頂上をきわめた喜びと周辺の雄大な光景、自然、しゃくなげの美しさなどをたっぷり観賞し、噴き出す汗を拭いながらの冷えたビールが、ただ冷蔵庫で冷や

ただけのそれと段違いな味なのは当然だろう。

山登りは「行きはよいよい帰りはこわい」で、上りはともかく下りが問題だ。急坂を下りる時は体を支えようとして足に体重がかかるとか休み休み、だましまししてやっと下山とあいなる。足腰を鍛えていないと難儀するのがまさにトレッキングのトレッキングたる

ゆえんだろう。

それで思い出したのが記者時代、地元の猟友会が五葉山のサルを採すというので同行取材した時のことだ。いつも出没する場所を熟知しているリーダーの案内で、これは確実に遭遇できるだろうと、望遠レンズを携えて出かけた

はいいが、相手が「敬猿」いや敬遠したのか、ついに出会えなかった。その間上り下りを何度繰り返したか。足がパンパンと張ってつ

いて行くのがやっとだった。普段山歩きに慣れている猟友会の面々がまったく苦にしないトレッキングも、こちらにはとんでもない負担だったのだ。

そのサルだが、もう三十年も前のことだろうか。目撃者はいても写真がないという当時だったから、半ば半信半疑でもあったせいか「マボロシのサル」といった記事を書いたところ、当時の猟友会長から「マボロシなのは記者のお前の方だ」とえらく叱られた覚えがある。

その後写真撮った人が続々現れて、いまや五葉山の住人として正式に認知されているが、同僚がその目で確かめることができたのはラッキーというものだろう。

最初の五葉登山は十代の頃で、麓から重いリュックを肩に両手に薪をさげてえちらおちちらと登った。登山口にある山小屋で一泊した思い出が懐かしく、仲間と一緒に撮った写真がアルバムに大切に保存されている。あれから、その半世紀も過ぎていた。(英)